

専門学校－短期大学奮闘史(上)



私が初めて本学の新しい仕事に携わったのは、卒業して2年目の昭和42年（1967）春であった。

その仕事は、東京滝野川の武石信治先生（33回卒）が持ちこんできた。当時、彼は日本歯科医師会専務理事で、武石学校と称された医政集団を引きいるボスであった。

彼はニコニコと、「東京金町の校友が歯科技工士学校を計画したが、個人立では認可されないの、母校で受け継いでほしい」という。本学の法人理事会で承認されたので、その足で私のところへ見えたらしい。なぜ、私などに伝えにきたのか？。まことに、唐突に重大事が飛びこんできた。

あとで知ったのだが、理事会では附属学校として議決したものの、あとの実務は誰も引きうけず、体よく私に押しつけたらしい。否応もなしに、武石先生に連れられて常磐線に乗り、金町駅に程近い小さな4階建ビルに案内された。それから私は、飯田橋と金町を往復する羽目になった。

忙しく専門学校設置の関係書類を引き継ぎ、設置者等を代えて申請しなおした。厚生省の歯科衛生課（当時）の視察をうけ、手厳しい担当官を車で現地

に案内した。理事の伊藤七郎が同行したが、車中、担当官とは話が弾まない。渋滞もあって、彼は「遠いですねえ」とボヤいた。助手席の私は、身が縮まる思いだった。

慣れない業務に孤軍奮闘している私を見兼ねて、院務部の大場軍勝が私の手助けをはじめた。彼は、賀陽宮の御付武官をつとめた元陸軍大佐で、65歳にして私と同じ昭和40年春に本学の職員となった。それから彼は15年間、私に伴走することになる。

当時、附属病院には歯科技工士は一人もいなかった。歯科技工は、専ら歯科医師の業務であった。ある日、歯科補綴学のY教授がすれ違いに、「中原君、技工士なんていませんよ」と大笑しながら去った。思いがけない一矢に、私は言葉を失った。補綴学教授が、歯科技工士に反感を抱いている…。

あわただしく、第1回の入学試験の手続きがはじまった。修業年限2年で、当時は、定員25名に約10倍の受験生があった。事務処理は経理部の役目と思っていた私は、きつい肘鉄を食らった。せめて、本館の経理部窓口を受付をおけるように頼んだが、それも経理部長の偏屈に拒絶された。

やむなく、本館と通りをへだてた大学院棟の玄関に受付を置いた。金町からの女子事務員に座ってもらったが、仕切りもない吹きさらしだった。私は電気ストーブと毛布を持ちこんで、なんとか彼女をなだめた。

困りはてたのは、専任の歯科技工士教員がいないことだった。それが開校直前に、当時、新潟の歯友会歯科高等専修学校校長の木暮山人先生（38回卒）から、専従技工士2名が派遣されてきた。“地獄で仏に会う”とはこのことで、心底、有りがたかった。

昭和43年（1968）4月、附属日本歯科技工専門学校は、中原 實 学長を初代校長として開校した。大場が事務長となって、万端、現場を取りしきった。

担当教員が飯田橋から講義に通ったが、じきに遠すぎるという不満の音があがった。たしかに半日がかりになるし、金町校舎は狭すぎると感じていた。飯田橋であれば、教員の移動はないし、教室も実習室も兼用できる。私は、理事会に金町からの移転を進言した。それも、2学年にならない早い時期がよい。

無計画すぎたが、開校からわずか2ヵ月、6月10日に全面移転することになった。厚生省も呆れたが、教育環境は改善すると了解した。まだ1学年だったので、私は、本館の通用門脇の小さい予備教室の使用を求めた。放課後に文化部のクラブが使っていたが、授業は16時に終わるので迷惑はかからない。

ところが当時は、学生運動の華やかなりし頃だった。血気盛んな一部学生に、格好の攻撃材料を与えてしまった。彼らは中庭に群がり、「技工学校導入反対！」とシュプレヒコールをあげて学生たちを煽った。

私は、思いがけない騒動に呆然とした。わずか25名なのだが、いくら阻まれても学生と争うのは避けた。泣く泣く、飯田橋西口駅前の角地に建つ2階建の分室に技工学生を入れた。ガラス張りのモルタル造りで、狭くて冷房もなかった。猛暑のなか彼らは、汗だくで借りものの机にノートをひろげていた。この成りゆきに苦情をいう者はいなかったが、私は、大場と交代で出席カードを配りながら唇をか

んだ。

至急、専用校舎を駅前用地に建築するように理事会に訴えた。頼める者もないので、私は、鉛筆引きの設計図を画いた。1階はホール、事務・教員室、学生控室、売店、2階に図書・標本室、学生控室、3階に教室、実習室。将来、歯科衛生士学校を併設するだろうと見込んで、4・5階を歯科衛生士用とした。設計の段階で、半側の6階が加えられた。

同じ頃、学生の強い要望に応じて、駅前角地に体育館を建てる計画がすすんでいた。駅前の一等地だったが、当時まだ病院を移すには敷地が足りなかった。

昭和43年（1968）9月9日、体育館にあわせて、歯科技工学校の新築工事地鎮祭が挙行された。3ヵ月余で設計された6階建の建坪200坪は、角地の体育館裏手の陰になる。現在の附属病院の玄関回りである。体育館に先だって9月上旬に着工し、工事は急ピッチですすめられた。

分室は解体されるので、工事の間、学生は同用地東側奥に仮設したプレハブの仮校舎を使用した。

6ヵ月余の工事をへて、翌44年（1969）3月中旬に、体育館に先がけてシンプルな実用的なビルが竣工した。新しい校舎に入ると、学生たちは喜々として階段やEVを登り下りした。転々とした彼らは、開校2年目にしてようやく落ちつける環境をえた。

授業がスタートすると、病院の医員の歯科技工は、加速度的に技工学校に回された。煩雑だった医員の技工業務は、半減した。ある日、あのY教授がバツ悪そうに、「技工士さん、役に立ってるよ」とテレ笑いした。私は、エヘへと愛想笑いした。さすがに、そォでしょう！とは言い返せなかった。

当時は登院生とよんでいた臨床実習生も、面倒な技工は技工学校に送っていた。ある時、大場から、導入反対の旗をふった学年の全員が、技工学校に歯科技工を依頼している、と知らされた。

「全員ですか…」と、私は絶句した。

(写真：駅前角地の分室の仮校舎。新校舎と体育館の地鎮祭の日に写す。左奥に式場の立看板がたつ)